
バレンタイン パニック

真冬

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

バレンタイン パニック

【Nコード】

N8899B

【作者名】

真冬

【あらすじ】

家も隣で同じクラスという好条件にもかかわらず、上條桜と向井田楓との関係は微妙だ。軽口を叩き合えるような関係にない幼なじみへバレンタインチョコを渡そうとした桜は……？

（前書き）

前回投稿した「エレベーター マジック」の続編となっております。
前回同様少女漫画仕様となっておりますのでご注意ください。

二月十四日。

それは、恋する女の子にとって勝負の日である。

朝っぱらからそんなことを考えつつ、私は桜坂高校の玄関横にあるロッカーの前で一人ひたすら悩んでいた。

バレンタインのチョコって、やっぱりバレンタイン当日に渡さなくちゃ意味がないよねえ。

でもって、渡すならこのロッカーに入れちゃうのが一番妥当な感じだよなあ。

でもなあ。

なんでわざわざロッカー？　って思われそうだし。

かといって直接渡すとか、そういうのかなり無理っぽいし……。

あーっ！　もうっ。どうすればいいのよーっ！　

「……桜？　何をうるうるしてんの」

自分のクラスのロッカーが並んでいる前をうるうるうるうると動物園のクマ状態で歩き回っていた私の耳に、低音で良く通る声が聞こえてくる。

「あ。園ちゃん、おはよう。いや、ちょっと……ね」

振り返ると、そこにはクラスメイトの園ちゃんこと園田今日子ちゃんが呆れた顔で私を見ている。

ん？　園ちゃん？

園ちゃんといえば、橘くん？

ってことは……！！！！

「園ちゃんってね。橘くんにどういうふうにチョコレート渡す？」

「チョコレート？」

周りに人がいないのを確認してから、私は園ちゃんに声を潜めて聞いてみる。

だって、園ちゃんと橘くんといえばクラスでも公認の「つきあっ

ていない」幼なじみカップルなんだから、絶対にチヨコ、渡すよね？
しかも、私と同じ「幼なじみ」っていう条件だし、これは参考になっちゃうんじゃないの？！

「そつ……そんなもん、なんであたしが徹平に渡さなきゃなんないのよ？」

「え？ 園ちゃん、橘くんにチヨコ渡さないの？！」

打てば響く勢いで否定された私は、思わずがくつと肩を落とす。
ちよつとちよつと？！ なんでよおつ！

「ええー？ ほんとに渡さないの？」

「渡してないわよつ！ 渡す理由がないんだからつ」

……なに怒ってんのよ？

私の質問に必要以上に声を大きくして答える園ちゃんの不自然さは気になるけど、渡さないっていうんだったら仕方ないよね。

うーん。どうしようかなあ。

「……なによ？ 桜は向井田くんにチヨコあげんの？」

「あ……えーつと、そ、それはどうかなあー」

園ちゃんが口にした名前に、私は動揺したままごによごにと語尾を濁す。

ってか、なんで園ちゃんってば私がチヨコを渡すっていったら向井田くんになるのよ？！

あ、ちなみに向井田くんってのは私の隣に住む幼なじみくんの名前。
前。

でも、同じ幼なじみでも園ちゃんと橘くんみたいにクラス公認の幼なじみカップルとは程遠い、微妙な関係なんだけどね。

それにしても……公認カップルの園ちゃんがチヨコを渡さないのに、私が微妙な幼なじみの相手にチヨコ、渡せるわけないじゃんっ！
あー！ ダメだつ。

とりあえずロッカーに入れとけ大作戦はパスってことにしようつ。
「それじゃっ！」

うだうだ考えてそう結論付けた私は、しゅたつと手を挙げて怪訝

そんな表情をしている園ちゃんの前から走り去る。
次の策を考えなくちゃ！

……って、考えてみてもイマイチ思いつかないんだよなあ。

だいたい、幼なじみ相手になんでこんなに緊張しなくちゃなんないんだろ。

んもうっ。バレンタインなんてなかったらこんなに悩むこともないのになあ。

「あつれえ？ 上條さん大丈夫？」

ブツブツとバレンタインそのものに文句を言いそうになりながら教室に入った私の目の前に、先ほどの園ちゃんの幼なじみとなる橘くんがにっこり微笑んで話しかけてくる。

「何が？」

「なんか、すごい疲れてる感じだね」

「ま、ね」

疲れるよー。バレンタインってこんなに疲れるものなのー？

はああ、と大きなため息をついてから、私はふと目の前にいる恋愛のエキスパートを見上げる。

園ちゃんには参考意見聞けなかったけど、橘くんならなんか参考になること言ってくれそうだなあ。

よっし！

「橘くんさあ。もし幼なじみからバレンタインチョコもらうとしたら、どういうシチュエーションが嬉しい？」

「幼なじみから？」

「うん」

橘くんの言葉にこっくりとうなずきながら、私はぼんやりと考え

る。

園ちゃんはチョコなんてあげないって言ってたけど、やっぱり橘くんとしては欲しいんだろっな。

ん、まてよ？

ってことはこの質問ってまずかった？

げげっ。

橘くんが園ちゃんからチョコがもらえると勘違いしたらどうしよう！

「別に俺はいつでもどこでも嬉しいけど？」

慌てて前言撤回しようとした私にむかって、橘くんはお得意のにっこりスマイルで嬉しそうに答える。

し、しまったあ。すっかりもらえる気でいる笑顔じゃんっ。

どどど、どーしよっ。

「今日子サンには朝イチに家の前でもらったし」

さっきの園ちゃんの言葉、伝えたほうが……ん？

サラッと口にした橘くんのセリフに、脳内でジタバタと慌てふためいていた私は思わず目を見開く。

もらった？ 朝イチに？

「家の前で？」

「そ」

呆然と聞き返す私に橘くんは満面の笑みで答える。

園ちゃんーっ！！！！ なに嘘ぶっこいてんのよっ！ ばっちし渡してんじゃんっ。

って、ちょっと待てよ。園ちゃんの性格からしてそんなにすんなりと橘くんに渡すとは思えないんだよね。

ってことは。

「それって、園ちゃんから？」

「うんにゃ、俺からチョコーダイって言ったんだけど？」

……だろっな。

園ちゃん、いいなあ。

幼なじみの相手が橘くんみたいな人だったら、バレンタインなんという緊張しまくりな行事もあっさりとスマートにことが運ぶんだろっなあ。

はあ、と小さくため息をついて、ふと横をむいた私の目に、見慣れた男子が飛び込んでくる。

もっさりとした真ん中わけした黒髪に、イマドキありえないのび太眼鏡。

自分の席で静かに本を読んでいるその男子は、私の隣に住む微妙な関係の幼なじみ、向井田楓十六歳。

……ヤツが相手だとこの行事もこんなにスマートには運ばないだろうなあ。絶対に。

「もういいや。橘くん、ありがとね」

難攻不落の砦を見つけたような気分になった私は、がつくりと大きく肩を落として橘くんに小さくお礼を告げる。

「上條さん、なんかわかんないけど頑張ってねー」

そのまま肩を落として自分の席につこうとした私の背中に、心配そうな橘くんの声がかぶさる。

うっ。ありがとっ。橘くんってほんとにいい奴だね。

ホームルームが終わってみんなが次々と教室を後にするその後姿をぼんやりと眺めつつ、私は特大のため息と共に机に突っ伏した。

一日中、チラチラと眼鏡男子を横目でチェックしていたけど、チョコを渡すような隙はどこにも見当たらず、私のカバンの中には未だバレンタインチョコがどっしりとその存在感を醸し出している。

うっう。なんかもう早く早く渡して自由になりたいよー。

「桜ーっ！ 早く行かなきゃ遅刻するよー」

机に突っ伏したまま一人こっそりと泣きまねをしていると、教室入り口から同じ部活の友達が大声で私を呼ぶ。

はああ。このままじゃ、結局家に帰ってからわざわざ持つていかなきゃなんなくなっちゃうなあ。

帰ってすぐとかも変だから、晩御飯終わった頃にお邪魔しておばさんとかに渡すはめになっちゃって、結局「幼なじみの付き合いで渡すバレンタインチョコ」みたいな感じになっちゃいそうだよ。

それじゃあ意味がないんだって！

何の為に私がここまで悪戦苦闘してるんだって話だよーっ。

やっぱりこれは、直接本人に渡さなきゃだめだ。

「ごめん！ 先に行つといてーっ」

ぐぐつとそんな決意をした私は、入り口で待っている部活の友達に向かってそう叫んで、一番後ろの自分の席に座って何かを書いている幼なじみのほうを見る。

教室に残っている人間は、もう数えるほどしかない。

というか、奴を除いて他の子達は、みんなカバンを手に教室を出るところだ。

浮かれきった足取りで教室を出て行くクラスの子たちのはしやぎ声が小さくなっていくのを確認して、私はぐつと体に力を入れて、自分の席を立つ。

心臓がばくばくいつてる。

口の中がカラカラに乾く。

目標は、教室の片隅で静かに机に向かっている幼なじみの向井田楓。

小柄な体に大きな丸い眼鏡。もっさりとした黒髪を真ん中で分けている眼鏡男子は黙々と一人机に向かって何かを書いている。

えーいつ！ なるようになれよ！

「む……向井田くんっ」

そんな覚悟を決めた私は、どうにかして声を絞り出す。

うつうつ。なんで隣に住んでる人間相手にこんなにも緊張しなくち

やなんないのよつ。

そんな文句を心の中で叫びつつ、自分の気持ちをコントロールできない私は緊張の渦の中で幼なじみの名前を呼ぶ。

「上條……さん？」

私の声にビククリしたのか、顔をあげた向井田くんは怪訝そうな様子で私を見上げる。

……ダメだ。くじけそう。

ものつそい表情が拒絶しているように感じるんですが。

橘くんみたいに、女の子は常に誰でもウエルカムな空気を醸し出してくれたらもうちょっと緊張しないと思うんだけどなあ。

ほんつと、私ってばこいつのどこがいいんだろ？

そんなことを思っていた私は、ふと向井田くんの手元を見て思わず首を傾げる。

そこには、今日の日直が書かなければならない日誌が広げられている。

あ……れ？ 向井田くんって今日日直だっけ？

確か今日の日直は――。

「関口くんたちは？」

「え？」

うん。確か今日の日直は関口くんと湊だったはず。なんで向井田くんが放課後残って日誌なんて書いてんのよ。

「ああ」

私の疑問に気づいたのか、向井田くんは納得したように口を一度ひきしめて、興味なさそうに言葉を続ける。

「関口と代わったんだ。用事があるらしいから」

「用事？」

向井田くんの言葉を受けて、そういえば、と思い出す。

たしか、関口くんには先月彼女がきたんだっけ？

で、湊は夏ごろから付き合っている年上の彼氏がいるんだよ。そうそう。

ってことは。

「あー。バレンタインデート、かあ」

私のその言葉に、向井田くんは肯定も否定もせずにシャーペンを握りなおす。

——バレンタインの日に日直を代わっちゃうんだもんなあ。

目の前にあるつむじを見下ろして、私は小さく笑う。

そうそう。向井田くんってこういう奴なんだよね。

初夏のエレベーターでの出来事を思い出して、私はほっこりと嬉しくなる。

そっかあ。

私、向井田くんのこういうところが好きなんだよ。

「んじゃ、コレ」

「？」

嬉しい気持ちでいっぱいになった私は、その幸せな気持ちのままカバンの中でじいっと出番を待っていた小さなチョココレートを目の前の眼鏡男子に差し出した。

私のなけなしの勇氣よ、届けっ！

「何？ コレ」

「……？？」

はい？ ナンデスト？

嬉しい気分で精一杯の勇氣を振り絞った私の気持ちを、目の前のこの眼鏡男子は思いつきり地面に叩きつけましたか？

二月十四日に四角い包みを女子から男子に渡すっていったら、普通それはチョココレートじゃないの？

あれ？ もしかしてちゃんと説明しなくちゃダメなの？

「な、何って……チョココレート、だけど」

「俺に？」

……他に誰がいるっていうのよ？

っていうか、とりあえずさっさとこのチョコ、受け取ってよーっ。ひたすら無言の圧力でぐいぐいとチョココレートを向井田くんへ渡

そうとするんだけど、無愛想な眼鏡男子は私の精一杯の勇氣に全く気づくことなく不審物を見るように私の手の中のを眺めている。別に爆弾じゃないんだからさっさともらってよ！

誰かが教室に戻ってきたりしたらどうすんのよーっ。

「あー。バレンタインだから？　でも、なんで今更上條さんが俺に義理チョコくれるわけ？」

惜しいっ！

向井田くんの言葉に、私は心の中で思いつきり突っ込む。

バレンタインっていう着眼点はばっちりなんだけど、義理チョコって言うのが間違ってるんだってばっ。

「ぎっ……義理じゃないからっ！　じゃ！」

なかなか受け取ってくれない向井田くんの動きに痺れを切らした私は、とりあえず向井田くんが今まで書き込んでいた日誌の上にチョコレートを押し付けて、脱兎のごとく教室を後にした。

教室を出る時に、誰かのイスだか机だかに足が当たった気がするけど気にしない。

痛さとかごめんなさいとかそういうのは全部後にして、私はそのままありえない速さで玄関前まで猛ダッシュをかます。

うがーっ！！！！

と、とりあえず渡したよっ。

頑張ったよ私！

あの視線に耐えて、よくぞ渡しきったよ！

朝、自分が動物園のクマ如くうろろろろろろろろろろろろろろろろろろの前で、思わず私は床に座り込む。

冷え切ったりノリウムの床が火照った体に心地いい。

気がつけば無意識に止めていた息を思いっきり吸い込んで、私はゆっくりと吐き出す。

ガチガチに緊張していた肺に、冷たい二月の空気が送り込まれる。と、同時に冷静になる私の脳。

今のって……完全に渡し逃げじゃん。

一応義理じゃないってことだけ伝えただけ……向井田くんがチョコレートをちゃんと受け取ったかどうか確認してないし！

あんなに緊張して直接渡したのに……もしかして意味なし？

「あー。もうちょっとどうにか言えなかったのかなあ。うう。私の馬鹿」

誰もいない玄関前の廊下で、一人小さくそう呟く。

あー。もう一回やり直したりとか……できない、よねえ？

あのイマイチ理解不能な眼鏡男子は私のこの気持ち、ちゃんとわかってくれてるのかなあ。

まだ少し震える自分の両手を胸の前でぎゅうっと握り締めて、私はひたすら教室に残っているであろう眼鏡男子に念じてみる。

どうか、向井田くんが私のこの気持ちをストレートに解釈してくれますように！

間違っても「義理チョコ」のまま思い込んでませんように！

……こんなにも頑張って渡したのに、「義理チョコ」で片付けられた日にゃあ、私のこの心臓が壊れそうな一日を返せて話よね。でもそれって、すっごくありえそうで怖いんですけど。

（後書き）

お読み戴きありがとうございます！

女の子にとってバレンタインは特別なんだーということを描きたかったのですが、いかがでしょうか？

面白かったら是非一言コメントをいただけると幸いです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8899b/>

バレンタイン パニック

2010年10月8日15時56分発行